

イエスの招き —マルコによる福音書10章の黙想を中心に—

土 井 宏 純

<はじめに>

I. 子供とイエス (13～16 節)

II. 富める青年とイエス (17～22 節)

III. 盲人バルティマイとイエス (46～52 節)

IV. 「仕える者 <διάκονος>」(43 節) について

<おわりに>

<はじめに>

日常的に行われる学生たちや教会の青年たちとの関わりの中で、最近強く感じていることがある。それは一言で言ってしまうと、人間関係を築くことが極端に苦手（どうしていいかわからない）になった青年たちが増加しているということである。彼（女）らの多くは言う。「友達はたくさんいるが、『親友』と呼べる人はいない」。学校においても、職場においても、表面的な関係を築くことは出来ても、それ以上の関係となるとなかなか難しいようだ。なぜ、そのような現象が青年たちの間で顕著になってきたのだろうか。理由はいくつも挙げられるだろう。少子化や都市化の問題、学歴優先主義や能率主義の蔓延、更には今日マスメディアの与える影響力は測り知れない。テレビ、ラジオ、雑誌、新聞等のマスメディアを通して与えられる「情報」が、現代の青少年たちの生き方や考え方に最も影響を与えていると言われて久しい。パソコン通信の普及、大衆化もその傾向を更に加速させている。

そのような理由によって、子供のころから個別化、孤立化を余儀なくされてきた今日の青年たちの特徴として、彼（女）らが他者との「対立」を極力避けるという体質を持っているように感じる。そのためか、彼（女）らの間で交わされる会話に注目すると、その内容は「情報」によって得た共通した話題がその殆どを占め、逆に自分の素

直な気持ち、思い、感情といった人間関係を築く上で最も重要な部分には互いに触れようとはしない。青年たちが集まると、すぐにカラオケに行こうとする。カラオケの持つ魅力は私も充分承知している。しかし、いつもカラオケでは上辺だけの会話に花が咲くことはあっても、それ以上の話題はその構造上期待出来ないのは確かである。いずれにせよ、今日の青年たちは「対立」を避けることによって、表面的な人間関係を生み出していると言えないだろうか。自分の考え、主張をはっきり言うことの出来ない青年たちが増えたと言われるのも、そのことと無関係ではないだろう。

さて、人間関係ということに関しては、ユダヤ人の宗教哲学者マルチン・ブーバー(1878～1965)がその著書『我と汝』の中で以下のように述べている。彼によれば、人間関係には二つの形態がある。一つは「われ—それ」であり、これは他者を「モノ」として捉えているような関係である。もう一つは「われ—なんじ」であり、これは他者との全人格的な関係を持つことを表している。そして、ブーバーは人間の現状は決して後者ではあり得ないと指摘している。彼がこの書を著して(1957)から既に40年以上が経過するが、上記の青年たちの姿に象徴されるように、現代は残念ながら「われ—それ」の関係がますます拡大していると言わざるを得ない。この小論では、本来的な人間関係のあり方を、新約聖書のマルコによる福

音書第10章の黙想を中心に考えてみたい。ガリラヤにおける宣教活動を終え、ついにエルサレムへ、十字架へと向かって行く、そのような緊迫した背景の中でのイエスとイエスに出会った人、イエスを取り巻く人々の姿に注目したい。

I. 子供とイエス (13～16節)

イエスと弟子たちは、ガリラヤからエルサレムへ向けて出発した。しかし、かの地で待ち受けている「あの出来事」を知っている者は、ただ主イエスご自身だけであった。彼らはヨルダン川を渡り、その東側に来た。多くの人々がイエスを求めて次々とやって来る。イエスも弟子たちもかなりの疲労を感じていた、そのような時であった。

何人かの人々（恐らく親たちであったろう）が、子供たちをイエスの所に連れて来た。それは、自分の子供たちに触れていただきたいという願いからであった。当時は、尊敬するラビ（ユダヤ教の教師）に対して、子供のための接手と祈りを乞うことはユダヤ人の習慣であり、そのことを通して奇跡的な力が伝達されると信じられていた。故に、イエスに触っていただきたいかったのだろう。しかし、弟子たちはそれを拒もうと親たちを叱責している。なぜなのだろう。恐らく、弟子たちは当時の律法に基づく価値基準に照らし合わせると、無知であり一般に負の評価（未完成な存在）を受けていた子供たちのために、疲れている自分たちの先生を煩わせたくはないという思いがそこにはあったものと思われる。否、その思いの更に奥底には、むしろ自分たちがそのような子供たちに煩わされたくないという思いがあったのではないだろうか。しかし、弟子たちのそのような態度を見て、イエスは憤った（*ἠγανάκτησεν*／原形 *ἀγανακτέω*）と聖書は記している。この *ἀγανακτέω* の *ἄγαν* は非常にという意味であり、この語がイエスに関して聖書の中で使われているのはここだけである。つまり、イエスはそのような弟子たちに対してただ一度激怒されたのである。かつて、弟子たちはイエスに自己を放棄することを求められた。⁽¹⁾ しかし、ここにおいても弟子たちはそのことを理解出来ず、むしろ正反対の自己中心的な態度をとろうとしているのである。それは、イエスの最も嫌う人間の姿であった。

「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきりしておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない（14～15節）」。

神の国に入ること、それはユダヤ人であるなら誰も望んでいることであった。しかし、当時の宗教的指導者であった律法学者やファリサイ人たちは、律法に基づく自分の義（功績）によってしかそれを得ることは出来ないと教えていた。そのような社会的背景を考えると、このイエスの言葉は実に革命的であったと言える。なぜなら、子供たちは律法に対して当然無知であり、何の功績も持ち得ないからである。しかし、イエスはだからこそ子供たちのような者が神の国に相応しいと言うのである。それは、イエスにとって神の国とは人間の業によるのではなく、神の側からの一方的な恵みの賜物に他ならないからである。イエスの目は、弟子たちから子供たちへと移った。それは、全てのものを包み込んでしまうような温かな目であった。子供たちはイエスとその村に滞在された幾日か、その姿を遠くから見ているに違いない。けれども、彼らは話したこともないイエスを慕っていた。子供の目というものは、真理を見抜く力がある。そして今、イエスの温かな目が自分たちに注がれたのである。子供たちは、イエスの言葉の前にぼう然と立ちつくす親たちと弟子たちの間を通り抜け、喜びに溢れてイエスに走り寄った。子供たちの中には、親たちや弟子たちのような自分の尺度で、しかも自己の利益のために行動するといった姿は微塵もなかった。彼らは、ただ何も出来ない自分の存在をそのままイエスにぶつけたのである。そのような子供たちに、イエスは手を差し伸べられ、胸の中に抱きかかえられ、その頭に手を置いて祝福された。この時、イエスの温かな目を知っていた子供たちは、今度は自らの身体でイエスの温かさを実感したのである。そして、その温かさは彼らの身体の中から生涯消えることはなかったであろう。

II. 富める青年⁽²⁾とイエス (17～22節)

イエスの一行は、エルサレムへの道を急いでいた。気が付くと、多くの群衆がその一行に加わっ

ており、その中には女や子供たちの姿も多く見られるようになった。いつもイエスはその中心にいた。

ある日のことである。イエスが歩み出そうとされると、一人の青年が走り寄りイエスの足下にひざまずいた。彼は富裕な前途有望なエリートコースを歩む一青年役人であった。幼い頃からユダヤ教の教えに通じ、今まで忠実にその戒律を守ってきた。しかし、彼はそれでも尚、どこからともなく押し寄せてくる心の渇きを感じていた。「自分にはまだ足りないことがあるはずだ。このままでは永遠の命を得ることは出来ない」。このように、この青年はいつも考えていた。永遠の命、それは正統的ユダヤの信仰にとって、まさしく究極的「善きもの」であったのである。今や彼は最高の戒めを求めてイエスに迫っていた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか(17節)」。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ(19節)」。イエスは、モーセの十戒をここで述べているのである。「先生、そういうことはみな、子どもの時から守ってきました(20節)」。彼はキッパリと答えた。決して高ぶりではなかった。この青年役人は、今まで真剣に一生懸命に努力して人生を生きてきたのだ。様々の誘惑にも打ち勝ってきた。しかし、真剣に生きれば生きるほど、彼の中に生ずる心の渇きは強くなってきたのである。「更に何か善いことをしなければ」。ここに、この青年の大きな落とし穴があった。彼がそれまで必死になって求めてきたものは、結局は何かをすることによって得られる自らの社会的地位や名誉、財産だったのである。そして、今求めている「永遠の命」すらも、彼にとっては地上におけるもう一つの幸せに他ならなかった。彼は、善いもの、より善いものを手中に収め、それらの上に最も善いものを積み重ねようとしているのである。自らが努力して獲得した「モノ」に自分自身の拠り所を彼は求めていたと言えるだろう。しかし、反面そこには他者のことなど関係ない、自分だけの幸福を求める自己中心的な彼の生き方が見え隠れしている。そのような不自由の中にあるこの青年の姿を見て、「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた(21節a)」。ここに、イエ

スの彼に対する態度が示されている。この「慈しんで」という動詞は、ギリシャ語では *ἀγαπάω* (*ἀγάπη* の動詞形) である。つまり、イエスは愛をもってこの青年の前に立っているのである。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい(21節b)」。このイエスの厳しい言葉は、決して嫌味でもなければ叱責でもない。真剣に生きようとしている者に向かっての、愛に基づく真実な言葉であった。取得を求めた彼は、逆にイエスによって放棄を促されたのである。多くの財産を自分の拠り所としていたこの青年はガックリと頭を垂れた。そして、悲しみながら立ち去っていった。イエスは、彼を自分の前から去らせてしまったのである。しかし、イエスの為した業は真実な業であった。上辺だけを取り繕うような態度ではなかった。イエスは、彼に対する深い愛の中で彼を去らせたのである。彼が去っていくその後ろ姿に、イエスの深い愛情の込められた目はいつまでも注がれていたことだろう。イエスのその目は、孤独から交わりへ、束縛から自由の世界へとその青年を解放しようとする温かな目であった。

イエスは、あり余る富の中で自分のことしか考えることの出来ないこの一青年に対して、人々と共に生きることを促している。しかし、私たちはこのイエスの言葉を現代に生きる私たちに対して向けられた言葉として受けとめたい。人々と共に生きること、このことなしに私たちはイエスに従っていくことは出来ないのである。走り寄り、ひざまずいてまで必死に求めたこの青年は、やがて顔を曇らせ、悲しみながら立ち去っていった。その限りにおいて、この出会いは切実ではあるが、はかない出会いに見える。しかし、私たちはやがてイエスの十字架の現実の前に、この青年がついにイエスに心を開き、真の出会い「われ一人」の関係になり、イエスに従う者となったと信じたい。

Ⅲ. 盲人バルティマイとイエス(46～52節)

イエスと共に弟子たちや群衆は徐々に目的地であるエルサレムに近づいていた。エリコ付近でヨ

ルダン川を渡り、エリコに到着。このガリラヤから始まった旅は、日を重ねるうちに見る見る大勢の群衆へとその規模が拡大されていったのである。そして、ここエリコにおいても更に多くの人々がこの集団に加わったと考えられる。エリコからエルサレムまでは、距離にして約27km。この長い旅も、いよいよ終局を迎えていた。続く11章では、彼らはついにエルサレム入城を果たしているのである。エリコから、この集団の思いは目前にしたエルサレムへと移り、いよいよ力強くその道を歩み出そうとした、その時にこの出来事は起こったのであった。

バルティマイという名の一人の盲人の物乞いが道端から叫び続けている。「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください(47節)」。「わたしを憐れんでください」とは、ギリシャ語で *ἐλέησόν με*。私たちが、いつも聖餐式の冒頭で唱えている「キリエ・エレイソン＝主よ、憐れみをお与えください」と同じ言葉である。「憐れむ」とは、傷ついた弱々しい存在を前にして、理屈なしに心から共感し、受け入れていくことである。この盲人であるバルティマイは、貧しさと差別に苦しみ、どこにも自らの拠り所を見出すことも出来ず、ただイエスにのみ拠り所を求めてすがりつく思いでイエスに叫んでいた。しかし、周りにいた多くの人々は彼を叱り黙らせようとする(48節a)。エルサレムへ向かって力強く歩み出したイエスを妨げる者として、人々は彼を黙らせようとしたのである。それだけではなかった。彼は、目が見えないという障害のために社会の中で罪人として排除され、差別を受けてきた。そして、今日もまた誰からも相手にされず、最後の望みのイエスに接することすらも拒まれたのである。しかし今日の彼はいつもとは違った。その差別の中にあっても、彼はますます大きな声で叫び続けたのである。「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください(48節)」。彼は、イエスにその全存在をかけて叫んだのであった。

イエスは、この男のために「立ち止まる(49節)」のである。イエスを取り巻く集団の目がエルサレムへと向かっているにも拘らず、イエスだけはこの一人の盲人の男のために立ち止まり、その目は彼に注がれたのである。イエスは決して自分の目

的達成のために、一人の人間の存在を切り捨てることはなさらなかった。むしろ、自らの目的の達成よりも、皆から排除されている一人の人間の存在を、より大切なものとしてイエスは考えているのである。バルティマイの喜びは、どれ程大きなものであっただろう。今まで障害を持って生きてきた彼の人生の中で、初めて人間として扱われたのである。彼はイエスの招きに心から感じ、上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスに歩み寄った(50節)。それは、目の不自由な彼が出来る最高の喜びの表現であつたに違いない。「何をしてほしいのか」というイエスの問いかけに対し、彼は率直に「目が見えるようになりたいのです(51節)」と答えている。そしてバルティマイの目は開かれた。しかし、単に彼の目が見えるようになったというだけではない。それは、彼の存在すべての復活でもあったのだ。ここにおいて、バルティマイは真にイエスに出会ったと言える。故に、彼はイエスに従っていく他なかったのである(52節b)。

さて、私たちはここで特に(52節a)のイエスの言葉に注目したい。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」。このようにイエスは言われた。決して、「私があなたを救った」「私があなたを癒した」とは言われていない。イエスは、主体を自分ではなく相手に置いているのである。つまり、この治癒物語の主体はバルティマイ自身に置かれているのである。ここにこそ、イエスの生き方、他者との関わり方の基本的な姿勢が明確に表れていると言えないだろうか。それは、自己中心ではなく、他者中心の生き方に他ならないのである。

Ⅳ. 「仕える者〈διάκονος〉」(43節)について

「しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者〈διάκονος〉になり、…(43節)」。この言葉は、12弟子の内のゼベダイの子ヤコブとヨハネが「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください(37節)」とイエスに願い出、それを知った残りの10人の弟子たちが憤慨している有り様を見て、イエスが弟子たちに語られた言葉の一節である。ここ

においても、イエスによって自己を捨てて従うように諭された意味が、全く理解出来ていない弟子たちの姿が露にされている。しかし、それは利己主義に基づく権力欲、名誉欲からなかなか自由になることの出来ない私たち自身の姿でもあろう。それらの欲は、結局は富める青年の中に見出せるように、人間を強弱の世界へ、支配と被支配の関係へと導くことになる。そのような弟子たちに、イエスは「仕える者〈διάκονος〉になれ」と言われたのである。このことは、イエスを理解する上で非常に大切である。なぜなら、続く45節では、イエスは自分自身についても「仕えられるためではなく、仕えるために来た」と言っているからである。ここでは、この〈διάκονος〉という語について考えたい。

新約聖書の中の〈διάκονος〉は、食卓の給仕者、僕、奉仕者、執事の意味を持つ。その動詞である〈διακονέω〉も、食卓に給仕する、仕えると訳される。また、この〈διακονέω〉は新約聖書の中に見出せる他の類似した語⁽³⁾とは区別され、個人的な奉仕というボランティアな意味合いを持つと考えられる。その中で、「食卓に給仕する」という意味でこの語が使われているのは、ルカによる福音書17章8節の主人と僕の譬や、ヨハネによる福音書12章2節またルカによる福音書10章40節のマルタとマリアの物語などの中に見出すことが出来る。これらは言わば普通の出来事として受け取れる。しかし、ルカによる福音書12章37節では主人と僕の立場が逆転し、読者に衝撃を与える。すなわち主人が僕たちの給仕をするのである。私は、ここにこそイエス独自の強調点が置かれていると思う。なぜなら、イエス自身の生き方や弟子たちに対する教えが、まさにこの形式の中に集約されているからである。イエスは明確に言っている。「しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者〈διακονῶν〉である(ルカ22:27)」。ヨハネによる福音書13章1節以下は、弟子たちの足を洗うイエスの記事である。当時、他人の足を洗うことはその相手に対して絶対の服従を意味した。故にペトロは「わたしの足など、決して洗わないでください」と言う。しかし、イエスは「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」と答えてい

る。ここに、イエスの思想の中心が存在する。つまり、人に仕えることなしには人間関係は成立しないのである。まさにイエスは、人間関係の新しいあり方を説いたと言えるのではないだろうか。このように、私たちはイエスの内に新約聖書の〈διάκονος〉の姿を見出すのであり、イエスの自覚と姿勢は、すべての人の〈διάκονος〉になることであったことを知るのである。そして、イエスは弟子たちに対して自分と同じように「仕える者〈διάκονος〉になりなさい(43節)」と語っているのである。やがて、パウロが自分自身のことを「神の〈διάκονος〉(Ⅱコリ6:4等)」「教会の〈διάκονος〉(コロ1:25等)」と言っているのは、まさにそのことを彼が強く受けとめていたからに違いないだろう。

以上のように、新約聖書の中から〈διάκονος〉という語に注目して考えてきたが、ここで明らかにされたことは「キリスト者すべてが〈διάκονος〉となることを求められている」ということである。キリスト者のあり方が、聞いて信じるだけではなく、イエスに従って生きることであるならば、それはつまり私たちキリスト者がこの世において〈διάκονος〉として生きることには他ならないのである。

<おわりに>

私たちは、マルコによる福音書10章の黙想を中心に、人々との関わりにおけるイエスの姿に注目してきた。イエスの人々に対する姿勢、それは「仕える」ことを通して実現する全人格的な関係、「われ一なんじ」の関係であった。イエスは、その短い生涯を徹底してそのように生きられたのである。特に、当時のユダヤ社会において未熟な者、役に立たない者、人権など持たない者として理解されていた子供たちや、神の罰を受けた者、神の祝福を受ける価値のない者として宗教的にも社会的にも軽視され、疎外され、差別されていた障害を持つ者や重い病気の者たちの側にいつも立たれ、「神の国はこのような者(弱い立場にある者)たちのものである」と宣言された。無条件にありのままの姿でイエスを慕って走り寄り子供たちを抱きかかえられるイエス、人々の冷たい視線とは対照的に深い愛を持って盲人バルティマイの前に立ち

止まるイエスの姿の中に、私たちは他者中心に、他者に仕えて生きるイエスを見るのである。また、イエスは富める青年を愛の中で去らせてしまう。そこには、決して表面的な結び付き、内実の伴わない関係を求めようとはされないイエスの姿がある。真の出会いのためには、イエスは決して「対立」を恐れてはいないのである。そして、イエスは私たちにも同じように生きることを求めている。それは、私たちもイエスのようにすべての人に愛をもって仕えて生きることには他ならない。

しかし、「われ—それ」の関係が支配的になっている現状の中で、私たちはいかにイエスに倣って生きることが可能になるのだろうか。私は、他者に向かう前にまず自分自身を深く見つめ、自分のうちにある「弱さ」を自分のものとして認めていくことが必要であると考え。「他者を、他のすべての人々を受容し愛することへの道をつくるには、まず自分のうちにある障壁、しっと心、他人と見比べる態度、偏見、半ば意識化された憎しみを認め、自分がみじめな者であることをありのまま認めていくことから始めなければならない⁽⁴⁾」。「仕えることを学ぼうとする者は、先ず第一に、自分自身を取るに足らない者と思うことを学ばなければならない⁽⁵⁾」。なぜなら、そのことを通して人間は自分が一人で立っているのではなく、他者に支えられ、赦されて存在していることに気付かされるのであり、更にその背後にイエスの十字架の出来事を通して、私たちの罪を赦し、力付けて下さっている神の存在を見出すからである。自らの弱さを認めることが出来て、はじめて人間は他者の弱さをも受け入れることが出来るのではないだろうか。そのような中で形成される人間関係は、決して上辺だけの関係にはならないであろう。と

は言え、私たちはイエスのように「われ—それ」の関係から離れ、完全に「われ—なんじ」の関係に生きることが出来ない。しかし、そこで諦めてしまうことなく、少しでもこの社会の中であって、本来的な人間関係を回復していくことが求められていると思う。

<はじめに>で指摘したように、私たちの社会は今後ますます情報化され、それに伴って特に若い世代では、人と人との直接的な関わり合いはより一層希薄になっていくことが予想される。そのような中であって、イエスがその生き様を通して模範を示されたように、私たちも神と人ともに仕えることを通して形成される新しい人間関係のあり方を真摯に求めていく者でありたい。イエスは、現代にあってそのように私たちを招いておられる。

注

- (1) 「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マルコ 8:34)。
- (2) マルコの表題は「金持ちの男」になっているが、マタイ(青年)とルカ(議員)の並行箇所と併せて、「富める青年」とした。
- (3) δουλεύω (奴隷として仕える)
θεραπεύω (看病する、癒す)
λατρεύω (雇われて仕える)
λειτουργέω (公務を果たす)
- (4) ジャン・バニエ『共同体—ゆるしと祭りの場』(伊従信子訳、女子パウロ会、1983) p.35。
- (5) ボンヘッファー『共に生きる生活』(森野善右衛門訳、新教出版社、1986) p.91～p.92。